

## 白秋アートギャラリー (12)

### 〈白秋とモネ〉

宮内 博子

上野の国立西洋美術館で〈モネ展〉が行われている。モネといえば水面に浮かぶ睡蓮の絵が思い浮かぶが、この展覧会でも実に多くの睡蓮の絵が展示されていた。その中に、パステル調を基調とした他の絵とは明らかに異なる、ビビッドな色調の睡蓮の絵が一枚あった。晩年、白内障の病により色彩に変調があった頃の作品である。

白秋もまた、晩年は目の病に冒され苦しんだ。

照る月の冷さだかなるあかり戸に眼は凝こらしつ  
つ盲ひてゆくなり

失いつつある視力で月のあかりははつきりとは見えないが、戸を照らす月の冷え冷えた感触は感じ取っている。この歌を冒頭にした『黒檜』には、視力が弱まる中詠んだ歌が多く収められている。

視力とぼし掌にさやりつつ白菊のおとろふる花の  
瓣熱ばみぬ

物の文繁にし思へばかいさぐる我が指頭に眼はの

ることし

見えなくなった眼の代わりとなったものは「指」、すなわち触覚である。花弁に触れる掌に、白菊の生を熱として感じとっている。眼が見えなくなることによって逆に得ることのできた鋭敏な感覚。白秋は、今までとは違った視野を手に入れたのかもしれない。

『黒檜』巻末において

…失明直前の薄明状態に坐らねばならなくなった。

この一生の重患に於て、他に補うてあまりある道の楽しみを得たことは、私の欣びである。私は寧ろ現在の境涯に於て幸せられてゐる。

と述べている。弱まる視力の中で見るものに、新たな感性を揺さぶられ、それを「道の楽しみを得た」と欣ぶ白秋の逞しさが、晩年の歌に力強さを与えているとも感じられる。庭に観て眼もひらく今朝のよろこびは雪つもる

木々の立体感なり

「見える」ということが日常であるとき、我々は眺めている風景をおそらく平面的に捉えている。視力を失っていくことにより、改めて庭の木々の立体感を確認したのでろう。視力の衰えにより活動範囲の狭まる中、我が家の庭は感性を呼び戻し、薄明の中においてもその創作意欲を助ける場所であったに違いない。絵を描くうえで重要な役割を果たしたモネの庭と同様に。